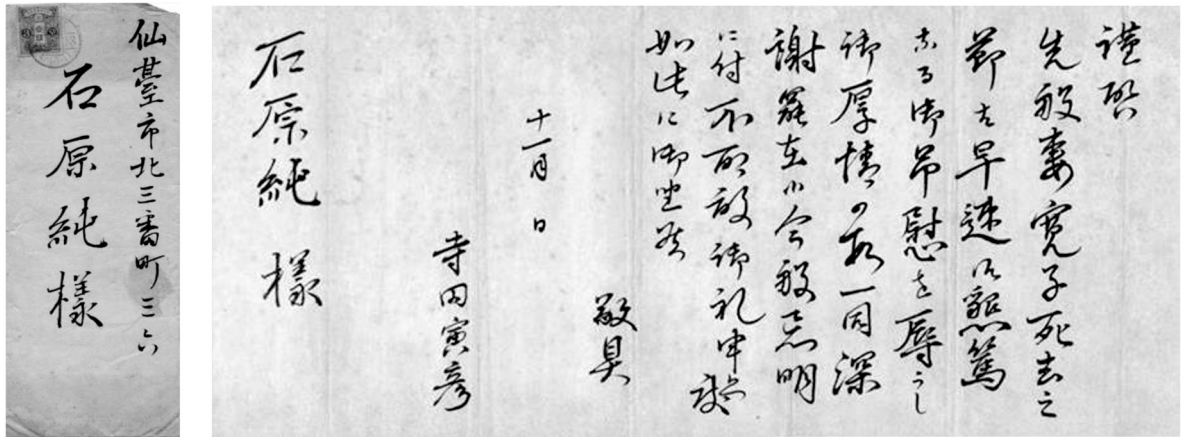


寺田寅彦から石原純宛ての手紙（印刷）2通

四宮義正

寺田寅彦から石原純に宛てた印刷の手紙2通について紹介する。

1. 大正6年11月13日付（消印）



これは妻・寛子の葬儀への弔意に対する礼状であり、相当数出したと思われる。全集を繙くと小宮豊隆宛てのものが収載されているので参考にしながら読んでみる。

謹啓 先般妻寛子死去之節は早速御懇篤なる御弔慰を辱うし御厚情の段一同
深謝罷在候 今般忌明に付不取敢御礼申上度如此に御坐候 敬具

十一月 日

寺田寅彦

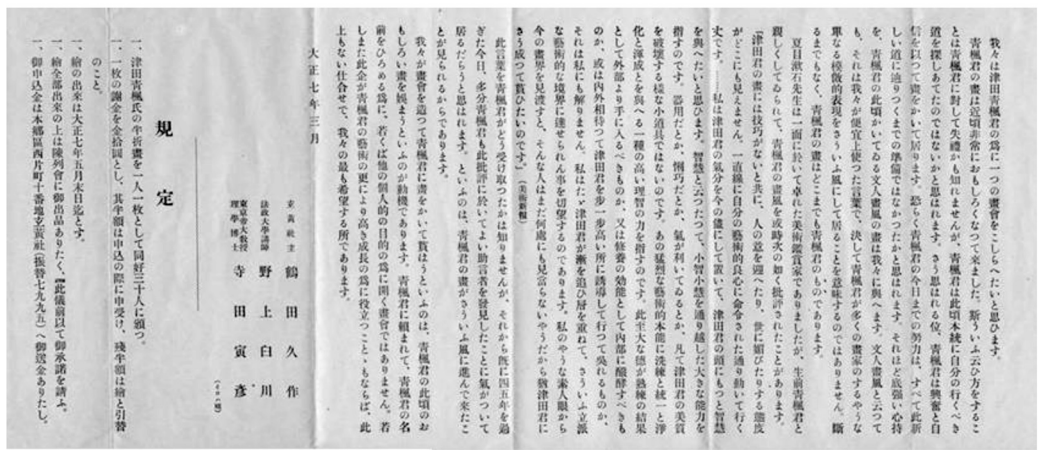
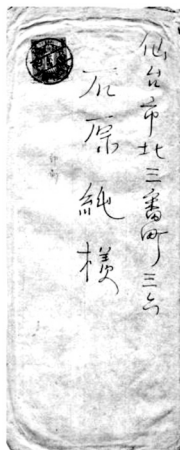
石原純様

小宮宛てには日の上の空欄部に「十二」と追記されている。本文は印刷であるが律儀な寅彦の性格から考えて、自分の筆跡を印刷したものだと推定される。

寛子の死去した10月19日から数えると翌月12日は24日後である。寺田家は神道のため忌明けは50日祭にあたる12月10日頃の筈なので、少し早いように思う。年譜によると12月10日は曙町に新築する住宅の上棟式である。12月21日には遺骨を携えて高知に帰り22日に埋葬、25日に帰京している。新居の建築準備と年末の帰省を控えて慌ただしかったためかも知れない。

妻を亡くした寂しさを紛らわすかのように、次に出てくる津田青楓と交遊している。全集によると青楓宛ての最初の書簡は大正7年1月7日付けである。

2. 大正7年4月8日付（消印）



内容は青楓の画会（頒布会）の勧誘状である。長いので最初の部分を転記してみる。

我々は津田青楓君の為に一つの画会をこしらえたいと思います。

青楓君の画は近頃非常におもしろくなって来ました。斯ういう云い方をすることは青楓君に対して失礼かも知れませんが、青楓君は此頃本統に自分の行くべき道を探しあてたのではないかと思われます。そう思われる位、青楓君は興奮と自信を以って画をかいて居ります。恐らく青楓君の今日までの努力は、すべて此新しい道に辿りつくまでの準備ではなかったかと思われます。それほど底強い心持を、青楓君の此頃かいている文人画風の画は我々に与えます。文人画風と云っても、それは我々が便宜上使った言葉で、決して青楓君が多くの画家のするような単なる模倣的表現をそういう風にして居ることを意味するものではありません。断るまでもなく、青楓君の画はどこまでも青楓君のものであります。

この後、夏目漱石が『美術新報』（大正4年10月11日）に発表した青楓の画風批評を引用し、画会の呼び掛けに続いている。日付は大正7年3月、発起人は玄黄社主 鶴田久作、法政大学講師 野上白川*、東京帝大教授理学博士 寺田寅彦の3名であり最後に募集規定が書かれている。（*野上豊一郎）

全集の日記と書簡から関連する内容を抜き出してみる。

○日記 大正7年2月26日

津田君画会主意書野上君執筆のもの廻し来り鶴田氏へ送付。

○書簡 同年4月20日 津田青楓宛て

小生が青楓画会の事を知らせてやった連中から続々申込があるようですが、余り沢山になって御迷惑なようでしたらどうか御断りください。しかしみんな君の絵をアップレシエート*し得る連中だとは思いますが、もし希望を叶へてやって下さい

ましたら小生としては大変に難有く思います。私の処へ通知して来たのは石原君の外には、秋田にいる理学士の田中館君（以下略、申込者の名前などが書かれている。

*appreciate：ありがたく思う、感謝する。）

○日記 同年 5 月 26 日

津田君来る。画会の絵出来たりとて持参。共に鶴田久作氏方に至り画を披見す。野上君も来る。

○書簡 同年 5 月 28 日津田青楓宛て

鶴田さんでは長坐御厄介をかけ恐縮致候。君も野上君も前からの御近づきだからよいが私は始めてで大変失礼をしたと思ひます。今度御逢の時どうか宜敷御挨拶を願います。（略）

今度の画会の画は一体に大変面白いと思ひました。なんだか前の方のには幾分図案的分子のあるのがあったように思ひますが、此頃のは花鳥でも純粋な絵画的の気分が発揮されて来たように思ひます。尤も此れは始めからそうかも知れませんが。例えば僕のかいて頂いた帖の中にある蓮池の図や兎の図などには図案的の分子が残って居たようですが、今度のになるともう余程趣がちがって来て、種々な気分が自由に出ているように思われます。矢張り何処迄も自由にのびのびと万事頓着なしにやるのがよいのではないのでしょうか。（略）

2 月 26 日の日記からみて勧誘状を書いたのは野上と推定されるが、津田宛ての書簡にあるように寅彦も青楓の画を高く評価し、『中央公論』（大正 7 年 8 月）に「津田青楓君の画と南画の芸術的価値」を執筆するなど熱心に応援していた。二人で話していたことが勧誘状に反映されたのであろう。

青楓は『寅彦と三重吉』（萬葉出版、昭和 22 年 10 月）で寅彦から貰った手紙を公開しているが 5 月 28 日の手紙には下記のコメントが付されている。

鶴田久作という人に招かれて野上君と寺田さんと私と三人御馳走になった。鶴田という人は小役人をしていて偶然出した本が当って、後に国民文庫刊行会という出版事業をやって、大きな叢書ものを次から次へと計画して出した人だ。私はいつも装釘役で屢々往来した。

玄黄社の所在は西片町 10 番地なので、引っ越し前の寅彦の近所である。画会は誰が言い出したのかははっきりしないが、鶴田にも世話になった筈で些か失礼な書きぶりである。

2 通ともかなりの数が配られたと思われるが印刷のためもあってか、あまり残っていないようなので紹介した。（書簡等のかな遣いを一部修正した。）